

DATA	
直近株価	789円 (2/1 終値)
単元株数	100株
決算月	3月
1年内高値	820円 (17/1/30)
1年内安値	460円 (16/2/12)
2017年3月期通期連結業績予想	
売上高	165億7100万円 (前期比3.2%増)
営業利益	10億8600万円 (前期比12.8%増)
経常利益	11億4500万円 (前期比19.4%増)
純利益	8億2700万円 (前期比12.9%増)

国内生産拠点を集約し効率化 成長分野への研究開発に注力

国内の工具業界では、大手工場会社がエンドミルなどの切削工具を主軸としているのに対し、同社のような耐摩耗工具・金型に特化した会社は競合他社が少ないのも同社の強みだ。輸送用機械や鉄鋼、非鉄金属・金属製品、電機・電子部品など幅広い業種に製品を提供し、取引先は約3000社に及ぶ。少量多品種の高付加価値製品の販売を可能としているのは、受注生

料缶は非常に速いスピードでプレスするので、金型の合金が緻密で硬く、摩耗しない素材でなければならぬ。同社は精度の高い金型を提供し缶の軽量化、薄肉化、小型化に貢献。最近ではコーヒーマシンを重視した広口ビンや飲料メーカー独自の形状など、多様な規格にもきめ細かく対応している。

産・直販体制を敷いて顧客のニーズに柔軟に対応しているため。国内では主要生産拠点を8カ所、営業拠点を13カ所に設置し、約100人の営業員が直接、顧客の生産効率アップにつながる提案をする体制を構築している。

主要原材料であるタンゲステン、中国などから輸入し、原料粉末の調製から焼結、機械加工、製品検査までの一貫生産体制を敷いているのも同社の特徴だ。

「直販や一貫生産にこだわるのは、顧客に近いところでものづくりをして対応するという考えが基本にあるから。例えば生産工程の一部を外注していると、納期などに融通が利かない場合がある。一貫なら短納期でお客様に届けることも可能」(西嶋守男社長)

今後の成長戦略の柱の1つは、業務の効率化による収益率の向上だ。近年の物流の発達を受け、国内生産拠点を集約。熊本製造所の増設に17億円を投資し、生産ラインの増強を進めている。

海外では中国、タイ、インドネシア、マレーシア、インドに営業拠点を設置しタイ、インドネシアには生産拠点も持つ。海外売上高は安定的に15%前後を維持しており、今後もアジアを中心に高付加

創業のダイス・プラグから 高精度の工具・金型製造へ

富士ダイスは超硬合金製を中心

自動車をはじめとする様々な機械の部品は、超硬合金を材料とした摩耗しにくい工具や金型を使って製造される。その超硬耐摩耗工具・金型を一貫した受注生産体制で製造・販売し、国内トップシェアを誇るのが富士ダイスだ。最近では強みの技術力を生かして新規の成長分野にも注力している。

超硬合金製の耐摩耗工具で国内首位 安定成長で創業以来の黒字を継続

富士ダイス(6167・東2)

とした工具・金型(耐摩耗工具)の製造・販売に特化した事業を展開。2015年度の国内出荷額は3割のトップシェアを占める。同社のルーツは、線材やパイプなどを生産するときに用いる工具の「ダイス」と「プラグ」にある。パイプ状の部品の外径を決める「ダイス」と、内径を決める「プラグ」は、創業以来の主力製品だ。

このダイス・プラグから、多様な超硬耐摩耗工具・金型へと発展した背景には、顧客からの要求に対応すべく、技術力を磨き上げて

価値製品の販売を増加させていく。さらに成長分野への研究開発を強化。医療・コスメ機器向け金型、

いった同社の取り組みがある。

「創業から約20年間はダイスが主体でしたが、ビール缶などの飲料缶を製造するための製缶金型を手掛けるようになりました。そこで高度な技術を身に付けたことで、後に他の分野へ展開できるようになりました」(西嶋守男社長)

ビールやチューハイ、コーヒーマシンの飲料缶を作るための製缶金型。同社が製造する製缶金型は、国内缶メーカーの約5割のシェアを占めている。

アルミ缶、スチール缶の製缶工程では、元々は板状の素材を筒型の製缶金型を使ってプレスして段階的に立体的に起こしていく。飲

次世代自動車部品向け金型、航空宇宙向け切削工具用素材・部品などにも力を入れる。



西嶋 守男 社長
昭和26年11月24日生まれ、山口県出身。昭和50年、慶應大学理工学部卒業。昭和53年に富士ダイス入社。平成21年、取締役生産開発本部長に就任。平成27年6月に副社長、同10月に代表取締役社長に就任。